

<前回：預言者とグローバル化>

(0) 危機の諸原因と12部族イスラエルの構成

1. 危機の原因

- ・内的原因：統一王国内部の社会矛盾＝南北問題＋格差問題
- ・外的原因：国際状況の変化＝大国の台頭（軍事拡張政策）

3. アッシリア（イラクの北部を中心にする。最盛期にはメソポタミアの全土とエジプトまで）の西方進出。北イスラエルは滅亡、南ユダは属国。

4. 南ユダ王国 → バビロン捕囚 → 帰還した民と民族再建の希望

5. 前6世紀：アッシリアからエジプト、新バビロニア、そしてアケメネス朝ペルシアとオリエント諸民族の状況は激変した。

6. 失われた10部族と、生き残ったユダヤ人。

民族的アイデンティティの持続の相違。イスラエル人からユダヤ人へ。

7. 「サマリア人」の起源：アッシリアによってサマリアに移住してきた諸民族と残留したイスラエル系住民との混じり合い。

(1) 預言者とその思想的課題

8. 古代イスラエルの宗教家：祭司、預言者、知者

「神の啓示を受け、神の名によって語る人」「預言のカリスマ」

神の言葉 → 預言者（言葉を預かる） → 王、民衆

「政治的状況で発言を行う扇動政治家・政治評論家」（ウェバー）

9. 先見者（ホーゼー）、見者（ローエー） cf. 恍惚預言者群

預言者（ナービー）

10. 民族の危機＝契約思想に基づく古代イスラエル宗教の危機

契約思想：神（主・ヤハウェ）とイスラエルの契約

子孫繁栄と土地取得の約束、信頼

→ 約束成就のプロセスとしての歴史

歴史の現実＝国家・民族滅亡の危機（バビロン捕囚、神殿崩壊）

↓

預言者はこの危機に直面して、古代イスラエル宗教の再生という課題に取り組んだ。

歴史意識の転換（契約思想の危機を乗り越える歴史の再解釈）

イスラエル民族の歴史的危機（バビロン捕囚）→預言者による歴史の再解釈（契約

違反＝罪と、罰としての滅亡）→イスラエル民族宗教の変革

↓

民族神から、諸民族の神へ（正義の神）。排他的一神教。メシア待望。

11. 滅亡預言：契約を破ったイスラエル（罪）への罰としての危機

12. 救済預言：救済の約束、契約の更新＝新しい契約 → キリスト教では、イエス・キリストをこの預言の成就と解釈する。新約＝新しい契約

(2) 預言者の思想 → 民族宗教から普遍宗教へ、グローバル化の先取り。

13. 社会正義：正義の神、不正・悪が滅亡の原因となる。民族から正義ではなく。

14. 排他的民族主義の克服

1) 古代イスラエルの宗教＝民族宗教、選民思想

・民族の救いとしての歴史・終末

ダビデ王家の再建 → 救世主（メシア）はダビデの子孫から生まれる。

→ 2) 旧約聖書預言者における民族主義とその克服

・苦難の僕：民族の相対化と新しい使命の自覚。苦難の意味。→ キリスト教へ

民族の滅亡を通して神の正義の普遍性は実現される。

15. 民族宗教から普遍宗教へ（民族宗教自体の内部からそれを乗り越える動きが現れる）

預言者の平和思想、諸民族の神であるヤハウェ、神は他民族を通して意図を実現する。

<イザヤ53>

1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるだろうか。2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。4 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと、と。5 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

11 彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

7. 知恵文学の意義

(1) 知恵思想成立の歴史的背景

1. 旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉
外典の知恵の書、シラ書（集会の書）
2. 創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状况（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム 世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。
3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成 学校の知識人
 - (1) 共同体の知恵（伝承）
 - (2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵
4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
因果応報原理の中心的な役割。
箴言1章8節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」
5. 知恵の教師イエス（1980年代からのイエス・ルネサンス）
転換的知恵（クロッサン）
↓
イデオロギーとユートピア

(2) ヘブライ的知恵文学の思想的特徴（概要）

- ①創造の知恵、あるいは知恵による創造
世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」
知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言8章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。
- ②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通じた神の讃美
→ 自然神学（書物としての自然）
- ③「知恵のある生活」
日常的な実践に関わる知恵に置かれている。箴言14章などに見られる一連の対照（「神を畏れる―神に逆らう」→「知恵―無知」、「正しい―悪しき」、「謙虚―高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする

る実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。

- ④因果応報とその限界。個人の問題として、そして共同体・民族の問題として。
この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。
「コヘレトの言葉」(「なんとという空しさ、なんとという空しさ、すべては空しい」)
「ヨブ記」は、正しく生きる人間(義人)が不幸になる、という問題(義人の苦難)

<聖書引用>

1. 箴言 1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。8 わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。 8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。
11:1 偽りの天秤を主はいとい／十全なおもり石を喜ばれる。2 高慢には軽蔑が伴い／謙遜には知恵が伴う。3 正しい人は自分の無垢に導かれ／裏切り者は自分の暴力に滅ぼされる。4 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。5 無垢な人の慈善は、彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆らいの罪によって倒される。9 神を無視する者は口先で友人を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。
2. 詩編 19:2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても 5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

<参考文献1>

1. フォン・ラート『イスラエルの知恵』日本基督教教団出版局。
2. 並木浩一『旧約聖書における文化と人間』、『「ヨブ記」論集成』教文館。
3. 富樫通一『旧約聖書の「知恵・教訓文学」』松籟社。
4. 関根正雄『旧約聖書文学史 上下』岩波全書。
5. 関根清三『旧約聖書と哲学——現代の問いのなかの一神教』岩波書店。
6. C・G・ユング『ヨブへの答え』林道義訳、みすず書房。
7. 宮下聡子『ユングにおける悪と宗教的倫理』教文館。

(3) 哲学的思惟と知恵思想との接点

6. 「世界の秩序」をめぐる聖書と哲学(古代ギリシャ)の交差
悪の問題(無、混沌、偶然、災害、不幸、無意味・・・)は、この秩序・合理性の説明と論理的に同型的な関係にある。
A・プランティンガ『神と自由と悪と——宗教の合理的受容可能性』勁草書房。
- ↓
7. 二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道
- ・ 神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学
 - ・ 人間の自然的理性(理性本性)の能力による神認識＝自然神学
- 創造論 → 世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する(知恵思想)。
→ 科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為(詩編19編を参照)
- 自然科学の基本前提
自然の合理性と人間理性による理解可能性
- 合理性の一元性、認識者と対象との二つの秩序の合致。
それを保障するのが、神の合理性と創造。

神の合理性と創造は、「知恵」に集約される。

8. 「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」(ローマの信徒への手紙 1.20)

9. 中世のスコラ学は、以上の思惟の到達点と言える。

自然神学：世界の秩序の探求から神へ

宇宙論的類型：トマス（5つの道）、ニュートン、人間原理

・経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・運動・変化の存在／「原因—結果」の連鎖／第一原因 → これを神と呼ぶ
芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。

10. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

↓

・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

・実在の構造 / 知識の構造 / 大学という制度的な構造 → 文明の形
(超自然/自然)

11. 研究課題：

聖書から、古代教父、中世へと、知恵思想の展開を思想史的に跡づけること。

・ Ben Witherington III, *Jesus the Sage. The Pilgrimage of Wisdom*, Fortress, 1994.

旧約の知恵文学、ヘレニズム・ユダヤ教、新約聖書

・ 有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』（著作集4）創文社。

第二部 キリスト教における信仰と思想

第四章 知ることについて

第五章 無と創造

第六章 クレメンス・アレクサンドリヌスにおける信仰と認識

第七章 啓示信仰と神秘思想